

2．資本主義社会とオリンピック

- 日本資本主義とオリンピック招致 -

内海 和雄

メインテーマ「資本主義社会とオリンピック」の「課題設定」は『一橋論叢』第134号第2号、2005年8月号に、「第2部 オリンピックはなぜ、いかに復興されたか」は『人文・自然研究』第1号、一橋大学・大学教育研究開発センター、2007年3月に掲載した。は1900年のパリ大会から1920年のアントワープ大会までの時期の検討の予定であったが、英国ラフバラ大学のイアン・ヘンリー教授との共同研究の関係で、急遽日本のオリンピック招致研究を先行させた。

まず、本稿つまり「日本資本主義とオリンピック招致」研究の意図について簡単に触れておこう。ここで取り上げるのは1940年の第12回東京大会と1964年の第18回東京大会である。共に夏季大会である。勿論冬季大会は1972年の札幌大会、1998年の長野大会があるが、テーマ「日本資本主義とオリンピック招致」を検討する上で、上記の2つの夏季大会とそれらの比較研究が十分な視点を提供しているので、それらに限定した。

1896年の第1回アテネ大会も含めて如何なるオリンピック大会も、取り巻く国際・国内情勢と無関係ではあり得ない。むしろ、当然な事であるがそれらの環境と密接に関連しながら、それぞれの大会は開催されてきた。オリンピックは決して真空の社会の中で、社会諸条件と切り離されて純粹にオリンピックのみで存在したわけではない。それらの総体の中でその時代のオリンピックは特徴づけられる。従って、オリンピック研究も、そうした社会諸条件を加味しながら、時代の総体としてのオリンピックを捉え、描く必要がある。しかし、この点が難題である。ここに、研究の立場、方法が問われる。すでにでも検討したように、オリンピックの社会科学的研究は僅少であり、そのことの克服がメインテーマ「資本主義社会とオリンピック」を設定した理由である。

先の2つの大会は時間的には1940年と1964年というたかだか四半世紀しか経っていないが、その中間には第2次世界大戦の終結、その後の東西冷戦の発生という世界的にも大きな時代的变化を経験している。しかし、いかなる時代であろうとオリンピック開催による国際社会へのアピールはオリンピック憲章に則った平和主義であり、国際友好である。しかし国内的には時の政権党、政府の政治課題遂行の有力な手段、千載一遇のチャンスとして位置づけられた。都市インフラ整備による経済的効果や、ナショナリズムの高揚である。政治・経済・社会・軍事のあらゆる領域に於いて、時の政権はそれを自らの政権の手段化のためにあらゆる方策を穷した。国際的なビッグイベントであるが故の宿命でもある。それぞれの世界的環境と国内的な条件の下にオリンピックは開催される。そして国際的ビッグイベントであるスポーツ競技大会故に、開催都市・国のスポーツへのインパクトも計り知れない。選手強化策のみならず、スポーツ・フォー・オールの特長でも、その影響は大きい。

本稿の目次は以下の通りである。

第1章 JOCの誕生と背景

1．日本のスポーツ状況

2．JOCの設立

第2章 1940年第12回東京大会

1．先行研究

2．招致過程

3．準備過程

4．返上過程

5．1940年東京大会招致の影響

6．1940年東京大会の特徴

第3章 1964年第18回東京大会

1．先行研究

2．1950年代後半から1960年代の時代

3. IOC、オリンピックの動向

4. オリンピック招致

第4章 「日本資本主義とオリンピック招致」 のまとめ

第1章 JOCの誕生と背景

1. 日本のスポーツ状況

当時、明治末前後の1890～1910頃のわが国のスポーツ状況は、欧米から輸入されて、あるいはそれらの地から来た教師や技師たちを通して大学や旧制高校のエリートたちの中で野球、庭球、蹴球、陸上競技、水泳、漕艇、ホッケー、スキー、スケート等が行われていたが、野球と庭球が抜きん出ている。庭球も硬式のボールが高価であったために、軟球を発明し、それは師範学校（教員養成機関）を通して、地方の学校に普及した。また陸上競技も記録を競うレベルでなく、学校単位の運動会程度のものであった。

2. JOCの設立

1909年に嘉納治五郎は東洋で初のIOC委員に選出され、1912年の第5回ストックホルム大会に参加するための国内組織として大日本体育協会を設立した。これがJOCの設立である。

第2章 1940年第12回東京大会

1. 先行研究

1940年の「幻の東京オリンピック」研究の意義は、大会それ自体が戦時下で開催不能となり、日本の組織委員会からIOCへ開催権が返上され、不成立であったことから、大会の招致・準備・返上に伴う、政治・経済・社会・軍事的諸背景との関連が究明の中心となる。オリンピック大会の開催は競技場の建設・整備のために莫大な公共資金を要する。これに都市インフラの整備が合流するとすれば、その予算規模は更に膨大なものとなる。それ故、たとえスポーツイベントであっても、決してスポーツ界だけの論理で事が進んできたわけではない。多くがそのパトロンである国や自治体の意向も斟酌しながら進められてきた。従って、その時代の都市や国が如何なる意向でオリンピッ

クを開催するかは、オリンピックの性格を大きく規定する。この点で、1940年の第12回東京大会はスポーツ界からの内発的要求よりも政治・経済・社会・軍事に翻弄された大会の典型である。

ところで、先行研究は一般的に経緯の記述は詳細であるが、それらを取り巻く世界情勢、国内情勢との関連で、第12回東京大会が如何なる性格を有したのか、という点での追求が弱い。ともあれ、先ず前提として日本がオリンピックという国際的イベントを開催できるほどに政治的、経済的な発展を遂げつつあったことを認識すべきである。だからこそ、IOCもそのオリンピズムの世界普及の理念に則って初の欧米以外の地として東京（日本）を選択したのである。

1940年の「幻の東京オリンピック」の決定は、1936年7月31日であり、翌日の8月1日は第11回ベルリン大会開始日である。また一方、同年7月19日からはバルセロナ人民オリンピックが予定されていたが、スペインの内乱によって中止となった。したがって東京決定は以下の視点からも位置づけられるべきである。

a)ベルリン大会の準備過程、バルセロナ人民オリンピックの準備過程との関連

b)当時の世界情勢（ファシズム - 自由主義 - 社会主義）との関連

c)日本の中国侵略情勢と国内の課題

d)日本のオリンピック準備活動

先行研究は、c)についてはある程度触れるが、a)b)が決定的に弱い。1940年の東京大会の経過は日本のスポーツに何をもたらしたのか。政治・経済・社会・軍事的に明治以来の「欧米に追いつき、追い越せ」政策の一環として、万国博覧会とオリンピックは世界の先進国の仲間入りの実証であると同時に、皇国日本のアピールの場であった。それが実現しようとしていた。スポーツ界への影響は、日本でのオリンピック開催の可能性が存在することを証明することにもなり、戦後の招致運動へと連動した。

2. 1940年東京大会の特徴

この大会に関して大まかには以下のように指摘

できるだろう。

日本にとってオリンピックが大きな意義を有するようになるのはロサンゼルス大会(1932)以降である。前回のアムステルダム大会(1928)以降、満州事変(1931)への批判に対して日本が国際連盟を脱退し(1933)、さらに侵略を強化していたから、世界的に一層の批判を受け、孤立している中で得た開催権である。

ドイツ・ナチスは歴史的に希に見る政治色を全面に出してオリンピックを主催した。その一方で、国家的な大会となったが故に、オリンピックの財政は大半が国家によって支えられ、オリンピック運営における1つの典型となった。

ドイツの「成功」の一方で、日本の特に実権を掌握しつつあった陸軍はオリンピックを理解・利用しきれずに、中止してしまった。ここでの差異はいかに考えたらよいのだろうか。第1に日本が既に中国大陸に於いて侵略の戦争中であり、直接に物資の調達に苦勞していたという背景の違いがある。第2に、陸軍がドイツ程にオリンピックを位置づけきれなかった理由は、オリンピックないし古代ギリシャとの関わりの違いにある。アリア人の直系の末裔を自認するドイツにとって、ギリシャ回帰は重要なテーマであった。第3に、オリンピックが持っていた欧米における位置の大きさであった。既にオリンピックは万国博覧会に取って代わって、世界最大の、最も影響力のあるイベントとしての名声を確立しつつあった。それ故、オリンピックはナチスにとっても恰好の宣伝媒体として利用された。

招致活動から見た特徴として、当初の招致理由は関東大震災による東京復興(都市振興)の次策の模索であった。しかし招致活動の途中から推進の理由として「皇紀2600年記念行事」が付随した。これは同年に開催予定だった万博と共に、政府の国際的孤立解消、皇国民イデオロギー高揚策として、国策化されていった。このような要請からオリンピック外交でなく国連的「政治外交」で強引な東京招致活動を行った。

日本、イタリア、ドイツ、イギリスそれぞれ

に国際政治の中で、政治的駆け引き、政治的利用、高度な外交手腕で事が進められた、極めて政治的経過の強い「大会」であった。この点で「第12回東京大会」は特徴的である。

1938年7月15日の「返上」決定に対して、ヨーロッパ諸国の実情も世界大戦が不可避の情勢の中で、参加できる状態ではなかった。

1936年のベルリン大会ではユダヤ人迫害、そしてナチスによるオリンピックの政治的利用に対して海外からはボイコット運動が起きた。1940年の東京大会に対しては軍事的侵略にボイコットないし中止要請が起こった。オリンピックボイコットが、スポーツそれ自体の問題ではなく、外的な政治的、軍事的な事情から発しており、この点でオリンピックの政治的利用が問題化された。

オリンピックはそれを取り巻く政治とは直接に対峙せず、独自の道を歩んだ。場合によってはファシズムの中でオリンピックが開催された。それでも政治からは一定の距離を維持しようとしながら進んできた。それ故に「政治に利用されている」との批判も多く受けた。現に開催する国においてはその国のイデオロギーの正当化のためにオリンピックを最大限に利用しようとした。この点で、オリンピック大会の評価は複雑である。

最後に、未開催であった第12回東京大会が日本のスポーツ界に与えた影響について考えたい。国民の福祉水準が低かったために、その一環としてのスポーツも十分には普及していなかった。一方、アマチュアリズムが厳格に守られていたことから判るように、日本のスポーツは未だにブルジョア階級たちのスポーツであった。それ故、国民のスポーツへの影響では、オリンピック開催種目への審判養成や日本としての対応から若干の普及は意図的に成されたが、社会的なスポーツ普及のきっかけとは成らなかった。しかし、準備過程における組織化を含めた蓄積は、戦後の大会招致の基盤となった。

第3章 1964年第18回東京大会

オリンピックの開催国での影響を分析する上

で、2つの視点からの分析が必要である。第1は国際的あるいは対外的なものであり、第2は国内的なものである。前者の多くはオリンピック憲章にも規定されて、国際平和と友好を正面に掲げる。主催国は世界に向けた存在のアピールを行う。

一方、国内的には政治・経済・社会・軍事等々のあらゆる側面に渡って、時の権力は自らの体制擁護の重要な手段とする。これは何もオリンピックに限らず、万博他国際的なビッグイベントであればあるほど、そして国家的な援助が加えられれば加えられるほど政府の介入、政府のリードは強力になる。オリンピックに限れば、1896年の第1回アテネ大会以降、それは同様であった。そして1936年のベルリン大会では国家内的意図が、まさに前者の国際的アピールにまで拡大してしまった典型である。1940年の第12回東京大会の位置付けもまた同じであった。当時は中国侵略の真直中であって、「皇紀2600年記念行事」のナショナリズムが全面を覆っていた。

1950年代中頃から1960年代全体を通して日本は高度経済成長のただ中にあり、それは「国民所得倍増計画」(1960)や「全国総合開発計画」(1962)が策定された時期である。そして産業構造の変化つまり軽工業から重化学工業への転換の中で、人的能力が強調され始め、長時間・高密度の労働に耐えうる労働力育成が産業界から要請された。また政治的に見れば、60年の安保闘争を経て国民の革新的エネルギーは一段と高揚しつつあった。これは政権党にとっては危険であり、そのエネルギーの拡散を策していた。と同時に日本がもはや敗戦国ではなく、戦後は終わり世界の中で先進国の仲間入りをしたという大国主義を高揚させ、それと結合しながらもっぱら精神主義的な「日本」を強調する国家主義に結合するように仕組まれた。

そして軍事的にはますます緊張の高まる東南アジアや朝鮮半島を睨んで、アメリカ軍のベトナム派兵の増強、第2次朝鮮戦争を想定した「三矢作戦」(1963)など、自衛隊の直接・間接の協力が画策されていた。こうした中で、自衛隊は憲法9条との関わりで、「違憲存在」であり、「市民権」

を得るための手段を強く求めていた。この点で、東京大会は自衛隊の国民への浸透策にとって千載一遇のチャンスであった。

1959年のオリンピック東京大会決定時には日本中が盛り上がったが、その後は1960年の日米安全保障条約改定をめぐって、日本中が2分され、政府自民党にとっても早晚社会党に政権奪取されかねない危機感を抱かせた。したがって、政府としても1964年のオリンピックを成功させ、その過程で国民の意識を政治から離反させ、あわよくば1968年の明治百年祭へと引き継ぎ、1970年の万博へ繋げて、同年に予定されている次の安保改定を乗り切る、体制の存亡を掛けた舵取りが求められていた。それ故、1960年の安保改定をやっとの思いで乗り切った10月18日、閣議は総理府に「オリンピック東京大会準備対策協議会」を設け、オリンピック担当大臣を任命し、東京都を飛び越えて国家的行事として本格的に取り組み始めた。

そして、今回の第18回東京大会は戦後の日本の復興を世界に知らせ、世界との友好を拡げたいとする国際的なアピールの一方で、国内的には、高度経済成長を経験しながら次第に勢力を増しつつあった日本資本主義、国家独占資本主義の経済的な要望と、アメリカのアジア戦略の一環に組み込まれ再軍備を要求されていた日本の政治、思想、軍事の動きも又この東京大会をチャンスにして大きな躍動を見せたのであった。それらの背後に1960年安保闘争で「大反省」をした新聞などマスコミの右傾化も大きな力を発揮して、世論操作に「貢献」した。確かにオリンピックそれ自体は大成功に終わり、多くの国民が日本人としての誇りと自信を獲得した一方で、それらの政治的動向が着実に進行していた。従って、1964年の東京大会を検討するとき、それがスポーツ分野に果たした影響のみならず、そうした政治・経済・社会・軍事的等の背景との関わりで、オリンピックが担わされた問題点も見ておかなければならない。

オリンピックの社会科学研究は数少ないと既に述べたが、オリンピックの始まる10日前、そして東海道新幹線の開通した10月1日に、それ

らを鋭く分析した1冊の小冊子が出版された。「国民文化会議マスコミ研究会」の出版した『にっぽん診断 - オリンピックの後どうなる』（三一書房）である。「東京オリンピックは今日の国際政治の現実の真直中であって、しかも、国内的には国家独占資本主義をより効果的に進める道具として位置づけられている」とする立場から、東京大会の政治・経済・社会・軍事的等の分析を行っている。

第4章 「日本資本主義とオリンピック招致」のまとめ

冒頭そして第2、3章の始めの先行研究の分析でも触れたが、第12回東京大会(1940)と第18回東京大会(1964)とは、研究上は大きな差異を持っている。前者は、競技大会自体が開催されなかった事にもよるが、研究は招致・準備・返上の過程の政治・経済・社会・軍事等、総称的に「政治的」な背景がより強く検討された。これは国際情勢、国内情勢の両者を含めてである。

しかし後者は、実際に競技大会も開催され、競技大会自体もIOCから5つの賞を貰え、国際的なメディアからも"the happy Games"、"the technology Games"、"the television Games"あるいは"the science fiction Games"との形容まで貰えたほどの大成功であった。(John Slater, 'Tokyo 1964', *Encyclopedia of the Modern Olympic Movement*, edited by John E. Findling et al., Greenwood Press, 2004, p165)それ故に、第18回東京大会について競技大会の経過を如何に感動的に記述するかに大半のエネルギーが注がれている。その一方で社会科学の対象として未だに十分に検討されていない。つまりここにオリンピック研究の大きな課題論、方法論としての一貫性の欠如が存在する。前者の「政治的」視点が後者では曖昧化してしまう。それは後者での「政治的」研究は研究者の現在の立場を鮮明化することが問われるからである。しかしそれと同時に、この問題は、外国のオリンピック研究の多くにも共通して

問われている課題でもある。「課題設定」でも触れたように、競技史、記録史あるいは競技者の伝記ものは沢山あるにも拘わらず、オリンピック競技大会が持った社会的背景との関連の研究とそこでの意義についての、社会科学的研究は決定的に弱いのである。

「第2部 オリンピックはなぜ、いかに復興されたか」でのギリシャ、アテネ大会の検討では、すでに第1回大会からオリンピックが国家振興にとって大きな意義を有したことを展開した。国際的に見ても従来のオリンピック研究における社会背景の分析はベルリン大会(1936)がその典型としてイメージされてきた。確かに、ドイツ・ナチズムのプロパガンダの手段としてオリンピックを利用したとするが、その研究状況は現在の私の仮説でいえば、強調されるほどにドイツ内でのオリンピック組織過程やその国内的影響の研究は少ないように思われる。(2007年8月段階における英語文献からの判断である。)近年、オリンピック開催に伴う国内の諸情勢の分析も出始めている。例えばシドニー大会(2000)の国内施策の分析がある。(Helen Jefferson Lenskyj, *The Best Olympics Ever? -Social Impacts of Sydney 2000-*, SUNY, 2002)

従って、東京をめぐる2つのオリンピック競技大会の比較研究は、日本国内のみならず、国際的なオリンピック研究における現状と課題について気づかせてくれる。1つには、各国内のオリンピック大会研究の中に国内で持った意義についての、社会科学的研究は必ず有るのではないか。もう1つはそれと併行して各競技大会それ自体と同時に、オリンピック全体を通史的にも社会との関連で追及し、その意味を問うた研究を探し出すことであり、我々自身がそうした研究を発信することであろう。

本稿の完成版は、『人文・自然研究』第2号(2008年3月)に掲載予定である。

以下の文献は で参考にした主要な外国文献（2000年以降、翻：翻訳あり） 2007.9.11 現在

- 2000 M.Roche, *Mega-events & Modernity-Olympics and Expos in the Growth of Global Culture*, Routledge
- 2000 Pierre de Coubertin, *Olympism, Selected Writings*, IOC
- 2000 Toohey,K.,Veal,A.J., *The Olympic Games:A Social Science Perspective*, CABI Publishing
- 2002 Barney,R.,K.,Wenn,Stephen,R.,Martyn,ScottG.,*Selling the Five Rings--The International Olympic Committee and the Rise of Olympic Commercialism--*, The University of Uta Press
- 2002 L.DoCosta, *Olympic Studies-Current Intellectual Crossroads*, Editoria Goma Fillo
- 2002 Christina Koulouri(ed.),*Archives and History of the Hellenic Olympic Committee*, International Olympic Academy, Athens
- 2002 H.J.Lenskyi, *The Best Olympics Ever?*, State University of New York Press
- 2003 IOC, *Olympic Charter,2.Role of the IOC*, in force as from 4 July
- 2003 A.Pasolucki(ed), *Postmodernity and Olympics*, Gdansk
- 2003 D. Miller, *Athens to Athens:The Official History of Olympic Games and IOC, 1894-2004*, Mainstream Publishing Company (Edinburgh)
- 2003 IOC,International Symposium, *The Legacy of the Olympic Games, 1984-2000*, 14-16 November, 2002, Lausanne
- 2003 J.Durry, *Coubertin, autography 1/1889-1915*, IOC
- 2003 Konstantinos Georgiadis, *Olympic Revival, The Revival of the Olympic Games in Modern Times*, EKDOTIKE ATHENON S.A.
- 2003 Mansour,S.Al-Tauqi, *Olympic Solidarity: Global Order & the Diffusion of Modern Sport Between 1961 to 1980*, Ph.D.thesis, Loughborough University
- 2004 Holger Preuss, *The Economics of Staging the Olympics-- A Comparison of the Games 1972-2008*, Edward Elger
- 2004 J.E.Findling et.al., *Encyclopedia of Modern Olympic Movement*, Greenwood Press
- 2004 R.W. Pound, *Inside the Olympics*, Wiley
- 2004 M.L.Smith, *Olympics in Athens 1896 to Invention of the Modern Olympic Game*, Profile Books
- 2004 Vassilis Kardasis, *The Olympic Games in Athens 1896-1906*, ISP, May
- 2004 Iphigenia Vogiatzi(ed.), *Athens in the late nineteenth century, the first international Olympic Games*, Historical and Ethnological Society of Greece
- 2004 C.Koulouri(ed.), *Athens,Olympic City 1896-1906*, International Olympic Academy, Athens
- 2004 Bale & Christensen(eds), *Post-Olympism?*, BERG